

数日前、私は結婚式に出くわした いや、待てよ！それよりもまずはヨールカにまつわる体験談を皆さんにお聞かせすることにしよう。結婚式は盛大で、私も式が気に入ったのだが、もう一つの出来事の方が更に印象深いのだ。

その結婚式を眺めながら私がどうやってヨールカにまつわる記憶を思い出したのかさだかでないが、それはつまりこんな出来事だった。

ちょうど5年前の事である。新年を迎えようとする夜のこと、私は子供たちのダンスパーティーに招かれた。私を呼んだのはある有名な実業家で、コネもあり、友人も多く、かなりの策略家でもあったので、このダンスパーティーは子供たちの両親が、罪もなく、たまたま偶然にという形で何か別の関心をそそる噂をする為に一堂に集まったと思えなくもなかった。

一方私は部外者で特に披露するような話題もなかったので、その晩は全く我関せずといった風で過ごした。

そこにはもう一人、私と同様にどうやら縁も身よりもなく家族の団欒に居合わせた人物がいて、誰より先に私の目に飛び込んだ。

それは背の高い痩せた男で、いたって真面目な表情、いたってパーティーに相応しい身装りだった。だが、どうやら彼は楽しいひと時や家族の団欒どころの騒ぎでないようで、どこか隅っこの方に身を潜めると、すぐにそれまで作っていた笑顔を止め、濃く黒い眉をしかめた。

パーティーの主を除けば、知人など一人もいなかったのだ。

どうやら彼は恐ろしく退屈しているながらも、終いまで完全に有頂天になった幸福な男性の役を雄々しく演じきろうとしているようだった。

私は後で知ったのだが、この田舎からやって来た紳士は、何か切羽詰まった事情が首都で発生し、パーティーの主人へ紹介状を持ってやって来たのだが、主人は彼を *con amore* (真摯にという意のフランス語) 庇護しようとはせず、専ら儀礼上の理由で彼をパーティーに招待したのである。

カードゲームが行われるわけでもなく、彼に葉巻が薦められるわけでもなく、誰かが彼に話しかけるわけでもなかった。どうやら遠くから毛色で判断されたい。そういうわ

けで我らが紳士は手のやり場もなく、一晚中あごひげをさすり続けなくてはいけなかったのである。

だが、そのあごひげはとても立派なものだった。

とはいえ、彼がいつまでもあごひげを撫で続けていたので、彼を眺めていると、最初に一つのあごひげがこの世に生を迎え、それからそのあごひげを撫でる為に付属品として彼が遣わされたとさえ確信されるのだった。

このようにして、丸々と肥えた五人の男の子の父である主人の団欒の集いに参加した人物の他にもう一人、私の感興を引いた人物がいた。

だが、こちらの方は全くの別物であり、顔役とも言える人物だった。ユリアン・マスター・コヴィチ、このように彼は呼ばれていた。

彼が最も大事な客であり、彼の主人へ取る態度が、主人が自分のあごひげを撫でてばかりいる紳士に取っている態度と変わらないことは一目でわかった。

主人も主人の妻もひつきりなしにお世辞を言ったり、食事を勧めたり、酌をしたり、チャホヤしたりで、客を紹介する際も彼のところまで客を引っ張ってきて、決して彼を誰かのところまで連れて行くこととはしなかった。ユリアン・マスター・コヴィチが夜会に触れてこれほど心地よく一時を過ごすことなど滅多にないことだと語った際には、主人の瞳に涙がキラリと光ったことに私は気付いた。

私はこのような名士と同席しているのがやにわに怖ろしくなったので、子供たちの姿を愛しむと、全く人気のない小さな客間に引っ込んで、ほぼ部屋の半分を占めている主人の妻愛用の花囲いに腰を下ろした。

子供たちは皆信じられないほどに愛らしく、家庭教師や乳母たちがどれほど言い聞かせても決して大人しくしていようともしなかった。

彼らは一瞬のうちにヨールカのお菓子をつ残さず取りつくしてしまい、そしてどれが誰にあたるかを知りもしないうちにおもちやの半分を壊してしまっていた。

特に素晴らしかったのは黒い瞳をした縮れ髪少年で、たえず木で出来た鉄砲で私を撃とうとしていた。

だが、だれよりも私の関心を惹いたのはそのお姉さんで、年は十一くらい、愛の天使のように美しく物静かで思わしげ、瞑想的な突き出た大きな眼をした蒼ざめた少女だった。

彼女はどうかやら子供たちに苛められたらしく、私の座っていた客間に引っ込んで来て何やら隅っこの方に座り込みお人形遊びを始めた。

客たちは敬意を持って彼女の親である裕福な商人を指さし、誰かがあの娘にはもう三万ルーブルもの持参金がつっておかれているのだとひそひそと囁いた。

私がそういつた事情に興味ありげな人たちに視線を移すと、その眼差しはユリアン・マスタークovichに注がれた。彼は両手を後ろでくみ、やや頭を横に傾げながら、きわめて注意深く、客たちの噂話に耳を傾けていた。

それから、私は子供たちに贈り物を分け与える際の主人夫婦の悪知恵に舌を巻かざるを得なかった。

三十万ルーブルの持参金を持つ少女は最も高価な人形を受け取ったのである。そこから贈り物は集いに参加した幸福な子どもたちの両親の地位の位置づけに応じて少しずつ品が下がっていった。

最後に、十歳くらいの、痩せた、小さな、そばかすだらけの赤毛の少年が受け取ったのは、偉大なる自然だとか、感動の涙だとかについて書かれてある、絵も飾りもないような一冊の薄っぺらい本だけだった。

少年は、主人の子供たちの家庭教師をしている、ある貧しい未亡人の息子で、ひどく怯えておどおどしていた。少年が着ていたのはみすばらしい南京産木綿の小さなジャケットだった。

本を貰った後になっても、少年は長いことほかのおもちゃの廻りをうろろろしていた。少年は他の子供たちと一緒に遊びたくてたまらなかったのだが、そうすることができなかったのだ。

どうやら、少年は自分の置かれている立場を感じ取り、理解しているようだった。

私は子供たちを観察するのが大好きだ。子供たちが人生で最初の自立性を発揮する様はきわめて趣深い。

赤毛の少年は他の子供たちの高価なおもちゃがうらやましくてたまらない様子で、特にお芝居遊びにいたっては何とかして何か役を貰いたかったらしく、ついには少年たちに取り入る決心をしたことに私は気付いた。

少年は微笑んで子供たちにおべっかを使ったり、大きなプラトックにお土産を包んでいた顔のむくんだ男の子にりんごをプレゼントしたり、ある子供を自分に乗せて運んでやりたりもしたのだが、それはただただ少年がお芝居遊びから追い出されないようにする為だった。

しかし、一分も経つとどこかのやんちゃ坊主が少年を強くぶった。少年は泣くこともできな

きない。そこに家庭教師である少年の母がやってきて他の子供たちの遊びの邪魔をはいけな

いと言いつけた。少年は少女のいる例の客間へと入って行った。少女は少年を自分のところに来させ、そうして二人はせつせと高価な人形の着せ替えに取りかかった。

私はかれこれ三十分ほど木蔭の花囲いに腰を降ろして人形の世話をする赤毛の少年と三十万ルーブルの持参金が用意されている美しい少女のあどけない会話に耳を傾けていたのだが、その部屋に突然ユリアン・マスターコヴィチが入ってきた。

彼は子供たちの喧嘩というスキャンダラスな機会に乗じてひっそりと広間を抜け出したのである。

彼が数分前に未来の裕福な花嫁のお父さんと、知り合いになったばかりだということに、どこそこの職務は他のに比べて得達というようなことを始終大声で喋っているのに私は気付いていた。

今では彼は思わしげに立ち尽くし、そしてどうやら指折数えながら何やら計算をしているようだった。

「三十万……、三十万か」

彼は呟いた。

「十一……十二……十三、それから……。十六、……五年か！四パーセントとして、年一万二千、五年で六万……。いや、うーん、全部で五年後には四十万になるとしよう。そうだ！待てよ……。四パーセントできくもんか、いかさま野郎だからな！たぶん八パーセントか十パーセントは巻き上げるだろうな。じゃ、五十、きつと少なくとも五十万は間違いない。余った分は女の布きれ代にでもするとして、うーん……」

彼は思索を打ち切ると鼻をかねて部屋を出て行こうとしかけたが、ふと少女の姿に気づくと立ち止った。彼は植木鉢の陰に隠れた私には気付かなかった。

私にはどうやら、彼がとても興奮しているように思えた。

先ほどまでの皮算用が効いたのか、それとも何か他の原因だろうか、ともかく彼は手を揉み合わせながら、その場に立ち止まっていることさえ出来なかった。

彼が立ち止り、再び、決意の込もった瞳を未来の花嫁に投げかけた時緊張は *le plus untra* (フランス語で極限の意) まで高まった。

彼は前方へ進み出ようとしかけたが、まず最初に周囲に目を配った。それから、まるで心の疚しさを感じているかのようになり、つま先立ちになって少女に近寄り始めた。

彼は微笑みながら近づくと、身をかがめて少女の頭にキスをした。

少女は予期せぬ襲来に驚いて叫び声を上げた。

「そんなところで何をしているんだい、お嬢ちゃん？」

彼はささやき声でこう訊きながら、周囲を見渡しつつ少女の頬を撫でるように軽くたたいた。

「遊んでいるの……」

「えっ？この子とかい？」

ユリアン・マスターコヴィチは少年を横目に見やった。

「おい、お前はいい子だね。そら、広間へ行きなさい」

彼は少年に言った。

少年は黙って、目を大きくして彼を見つめた。ユリアン・マスターコヴィチは再び周囲を見回すと、再び少女の方へかみこんだ。

「可愛いお嬢ちゃん、何持ってるんだい？お人形さんかな？」

彼は尋ねた。

「お人形さんよ」

少女は眉をしかめ、少しばかり怯えたように答えた。

「お人形さんだね……ところでお嬢ちゃん、このお人形さんがなんで出来ているか知っているかな？」

「知らないわ……」

少女はささやき声で答えるとうつぶむいた。

「布きれて出来ているのさお嬢ちゃん。ほら坊や、広間の友達のところへ行くんだ」

ユリアン・マスターコヴィチは少年を厳しく睨みながら、こう言った。

少女と少年は眉をひそめて抱き合った。二人は別れたくなかったのである。

「ところでね、なぜこの人形がお前さんにプレゼントされたのか知ってるかい？」

ますます声を低めながらユリアン・マスターコヴィチは尋ねた。

「知らないわ」

「それはね、あなたがとても可愛いらしいお嬢ちゃん、この一週間お行儀よくしていたからだよ」

ここで興奮が極まったユリアン・マスターコヴィチは、周囲をぐるりと見渡すと、声を一層低めて、緊張と興奮に途切れた聞き取れないほどの声でついにこう訊いた。

「お前さんは私を好いてくれるかな？可愛いお嬢さん。私がおまえさんのお父さんお母さんのところへお客に行った時にさ」

こう言つと、ユリアン・マスターコヴィチは再び可愛いお嬢さんにキスしようとしたのだが、赤毛の少年は少女がほとんど泣き出しそうなのを見ると、彼女の両手を手にとって、深い同情のあまりすすり泣いた。

ユリアン・マスターコヴィチは本気で腹を立ててしまった。

「出て出て出て、この場所から出て行くんだ！」

彼は少年に言った。

「広間へ行くんだ！ほらそっちへ、友達がいる方へ行くんだ！」

「いえ、いいのよ、いいのよ！あなたこそあっちへ行きなさいよ！」

少女はこう口にした。

「あの子をここにいさせて、あの子をここにいさせて！」

ほとんど泣きながら少女は言った。

扉のところでは誰かがざわつき始め、ユリアン・マスターコヴィチはすぐさま立派な体軀を起こして驚きたじろいだ。だが、赤毛の少年はユリアン・マスターコヴィチ以上に驚いたようで、少女を放り出すと、そつと壁際を伝って客間から食堂へ通って行った。

嫌疑をかけられないように、ユリアン・マスターコヴィチも同様に食堂へ通って行った。彼はザリガニのように真つ赤になって、ふと鏡を覗いたが、何だか彼自身決まりが悪そつだった。

きつと、彼も熱くなりやすく我慢のきかない自分の性格がいまいましたのだから。

ひよつとすると、指折り数えた最初の計算に心突かれ、魅せられ、そして靈感さえも受けたので、彼は自らの貫録や地位をも省みず、少なくともまもな交際相手となるには五年はかかるその対象へ向かつて、少年のように接舷戦法を行おうと決意したのかもしれない。なかつたのだ。

こうして私が尊敬すべき紳士の後に続いて食堂へ入っていくと、そこには奇妙な光景が展開していた。

ユリアン・マスターコヴィチが怒りと憎悪に顔を真つ赤にして、彼から遠くへ逃げたいのだけれどもどこへ逃げたらいいのかわからない赤毛の少年を脅かしていたのである。

「出てけ、こんなところで何をやってる、悪ガキめ、出てけ！どうせここで果物でも盗んでいたんだらう、お前は、えっ？ここで果物でも盗んでいたんだらう、お前は？出てけ、悪ガキめ、出てけ、鼻たれ小僧、出てけ、友達のところへ行つてしまえ！」

びつくりした男の子は最後の手段を取ることを決めてテーブルの下に潜り込もうとした。すると、怒り心頭に達した少年の追跡者は長いバチストの（絹などで出来た薄い上等な平織りの布。発案者からその名がとられた）プラトックを取りだし、それを使って、全く黙りこくってしまった少年をテーブルの下から叩き出し始めた。

ここで断つておかなければいけないが、ユリアン・マスターコヴィチはやや太り気味だった。彼はさぞ満腹しているかのようで血色もよくずんぐりとして、太鼓腹と脂肪のついたふとももをしており、一言でいふなればクルミのように頑丈で丸々としているのである。彼は汗だくになって息を弾ませ、ひどく紅潮していた。

遂に彼はほとんど怒り狂つたようになった。それほどまでに彼のなかで憤怒の感情が、

いや、ひよっとすると（真相は彼にしかわからないだろうが）嫉妬の情が高まったのである。

私はのどの底から大笑いした。

ユリアン・マスターコヴィチはこちらに振りかえると、たいそうな社会的身分にもかかわらず完全に取り乱してしまった。

この時、反対側のドアから主人が入ってきた。

少年はテーブルから這い出て膝や肘のほこりをはらった。

ユリアン・マスターコヴィチは、それまで両手で隅の一片を握っていたプラトークを慌てて鼻へと持つて行った。

主人はどこか不審そうに私達三人を眺めていたが、人生を知り、かつ人生を真面目な側面からとらえる性格だった主人は、すぐさま自分の客と対面で話し合える好機を活かした。

「この子なんです、これが、あの少年なんです」

赤毛の少年を指さしながら主人は言った。

「私が請願の栄に賜りましたのは……」

「何ですと？」

ユリアン・マスターコヴィチは、普段のとりました格好を取り戻せないまま応えた。

「私の子供たちの家庭教師の息子なのです」

主人は哀願口調で続けた。

「貧しい女性で、未亡人で、ある名誉ある官吏の妻なのです、ですから……ユリアン・マスターコヴィチ、できますれば……」

「ああ、だめですな、だめです」

まくしたてるようにユリアン・マスターコヴィチは叫んだ。

「だめですな、お赦してください、フィリップ・アレクセーヴィチ、どうしてもそれはできません。私は問い合わせたのですが、空きがありませんでしてな、もしあったにせよ、

もう、少年よりはるかに優先的な権利のある候補者が既に十人もおりましてな……残念ですな……非常に残念です……」

「残念ですな……」

主人も繰り返す。

「控えめで静かな子なんですがね……」

「とんでもない悪ガキですよ、私の観察したところじゃね」

ユリアン・マスターコヴィチはヒステリックに口元をゆがめながら答えた。

「行くんだ、小僧、何つつ立つてるんだ、友達のところへ行ってしまえ！」

少年の方を向きながら彼は言った。

そこで彼は、どうやら我慢しきれなくなったようで、チラツと私の方を覗いた。

私も我慢しきれなくなつて、面と向かつて大笑いした。

ユリアン・マスターコヴィチは、すぐさま顔をそむけると、わざとらしく随分はつきりと主人に対して、あの若者は一体何者だね？と私の事を聞き始めた。

彼らはひそひそ囁き合いながら部屋を出て行った。

それから私が見ていると、ユリアン・マスターコヴィチは、主人の説明を聞きながらいかにも釈然としない様子で頭を揺らしていた。

思いつき笑いながら、私は広間へと戻つた。そこでは例の偉大なる紳士がたくさん家族の父母や主人夫妻に取り囲まれ、紹介されたばかりのある婦人へ熱心に何かを説明していた。

婦人は、十分前ユリアン・マスターコヴィチが客間で一場面演じた少女の手を握つていた。

たつた今、彼は可愛らしい子供の美しさだとか、才能だとか、優雅さだとか、育ちのよさだとかについて賛辞と歡喜の言葉を撒き散らしていたのである。

誰の目から見ても、彼が少女の母親に取り入るうとしてるのははつきりとしていた。

母親は彼の言葉を聴いて歡喜の涙を流さんばかりである。

父親の唇も微笑にはころんでいた。

主人は一堂の喜ばしい雰囲気に満悦そうだった。

客たちは皆味方をして、会話の邪魔をしないように子供たちの遊びさえもがやめさせられた。

周囲は敬虔な雰囲気に包まれていた。

それから暫くして、周囲の関心を独り占めにした娘の母が心の芯まで感動し、極めて優雅な表現でユリアン・マスターコヴィチに、彼を自宅へ大切な御客様としてお迎えする榮譽に拜させてもらつよう願ひ出るのを私は聞いた。

すると嘘偽りのない歡喜の情と共に、ユリアン・マスターコヴィチが招待を受け入れ、そこで客たちはみな作法通り方々へ散らばつて行きながらお互いに、娘の徵税代理人である夫妻と少女、そして何よりユリアン・マスターコヴィチを感動的に褒め称えているのが耳に入った。

「あの方は結婚なさつていらっしゃるんですね？」

私は誰よりもユリアン・マスターコヴィチの近くに立っていた知人の一人にわざと大きな声で聞いた。

ユリアン・マスターコヴィチは私に驚きと憎悪に満ちた眼差しを投げつけた。

「そんなことはありませんよ！」

知人は、場違いな私の言葉に心の底から痛ましそうに答えた。

最近のことである、私が××教会のそばを歩いていると、人だかりと馬車列が私を驚かせた。

周囲では結婚式の話をしていた。天気はどんよりと曇っており、霧雨が降りだし始めた。私は人込みを掻き分けて教会へと入っていき、花婿の姿を目にした。それは、小さな丸々とした、太った太鼓腹の男で、やたらに装飾を施していた。

彼は駆け回ったり忙しく動き回ったりしながらあれこれと指図して取り仕切っていた。そしてついに花嫁が到着したという声が上がった。

私は人山を押し分けて進み、ようやく人生の初春が訪れたばかりという、この上なく美しい女性が目に入った。

だが、彼女は蒼ざめ、さびしげな様子だった。

彼女は放心したような目つきをしていて、先ほどまで流した涙のせいで彼女の瞳が赤くなっているように私には思われた。

彼女の顔の輪郭が放つギリシャ彫刻のような厳格さが彼女の美しさに何か神聖で壮麗な雰囲気を与えていた。

だが、その厳格さや神聖さ、その憂いから、まだ幼い少女のあどけない面影もが覗いて、それは何だかこの上なく無邪気で、大人になりきっていない初々しさの顯れで、言葉に出さねど何か赦しを乞っているようだった。

彼女は16歳になって間もないとのことだった。

私が花婿を注意深く眺めていると、それがちょうど五年もの間目にしていなかったユリアン・マスターコヴィチであることにハッと気がついた。

私が花嫁に視線を移すと……おお、神よ！私は人波をかき分けて教会を後にした。

人込みのなかでは、花嫁は金持ちで花婿の持参金は五十万ルーブルもあって、布きれ代にこれぐらいだった……というような会話がされていた。

「それにしても計算はドンピシャだったな！」

ようやく通りへと辿りついてから、私はふと考えた。

Copyright (C) 桃井富範 All Rights Reserved.

ドストエフスキー作品解説書『すらすら読めるドストエフスキー』好評発売中！